

(4) 宇垣匡雅は宮山型とは別に弁天塚型を設定しているが、本稿では宮山型という表現で統一した。

宇垣匡雅「10 特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 平成4年11月

参考文献

宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号

考古学研究会 昭和56年3月

宇垣匡雅「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会 昭和59年12月

宇垣匡雅「特殊器台形埴輪の文様と編年—古市秀治「特殊器台形埴輪の研究」について—」『考古学研究』

第43巻第4号 考古学研究会 平成9年3月

近藤義郎「第5章 あとがき」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 平成7年7月

近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会 昭和42年

高井健司「18 特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 平成4年11月

高橋 護「組帯文の展開と特殊器台」『研究報告』5 岡山県立博物館 昭和59年3月

田中英夫・奥田 尚「奈良県中山大塚古墳の特殊器台形土器」『古代学研究』109 古代学研究会

昭和60年11月

野々口陽子「いわゆる畿内系二重口壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財

調査研究センター 平成8年3月

春成秀爾「箸墓古墳の再検討 2 箸墓古墳の埴輪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 昭和59年1月

古市秀治「特殊器台形埴輪の研究」『考古学研究』第43巻第1号 考古学研究会 平成8年6月

丸山竜平「大津市壺笠山古墳の特殊器台形埴輪について」『究班』 埋蔵文化財研究会 平成4年9月

安康天皇 菅原伏見西陵見張所改築工事箇所の調査

第20代安康天皇の菅原伏見西陵の見張所が経年のため老朽化し、改築工事が計画された。先に掲載した事前調査の期間にあわせて、基礎工事部分(長さ4.0×幅4.0m、深さ0.6m)及び下水管埋設部分(長さ47.8m、幅0.8m、深さ0.3~1.8m)の掘削にあたって立会調査を実施した。

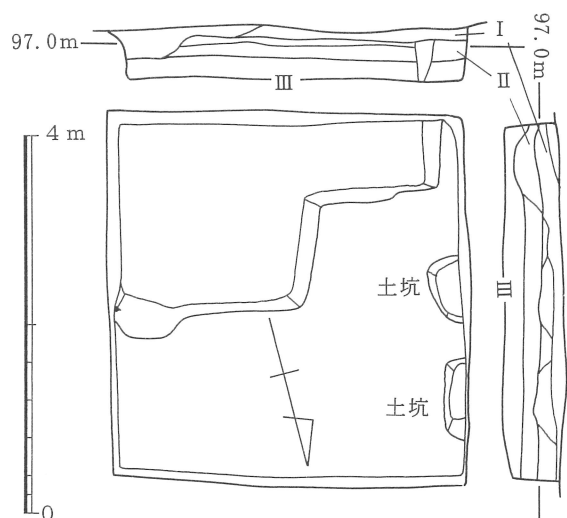
基礎工事に伴う掘削箇所は第1図に示した箇所であり、土層は大きく3層に分けることができる(第20図)。

I層 表土(黒色腐食土)。

II層 赤褐色粘質土の盛土。

III層 黄橙色粘質土の地山。

この土層のうちI層を除去した時点で、土坑状の落込みが掘削箇所西端で検出された。よって



第20図 菅原伏見西陵調査箇所平面図
および断面図(1/40)

この部分を掘削したところ、II層において検出した土坑内よりガラス瓶、陶磁器片が出土し、この落込みがきわめて新しい時期のものであることが判明した。そのほかこのII層からは須恵器甕片3点、土師質甕把手片等7点、瓦片2点など、合計15点出土しているが、いずれも小破片であり、全形を窺うことはできない。いずれもまとまって出土するものではなく、それぞれの遺物の所属時期も異なることから、客土として持ち込まれた土に混入していたものであろう。よってII層の盛土も古い時期になされたものではなく、この拝所を整備した際のものであると判断した。その下は、黄橙色の均質な粘土層であり地山であると判断できる。

下水管理設部分は参道に沿って掘削をおこなったが、表土の下にすぐ地山層が検出され遺構・遺物は一切出土しなかった。

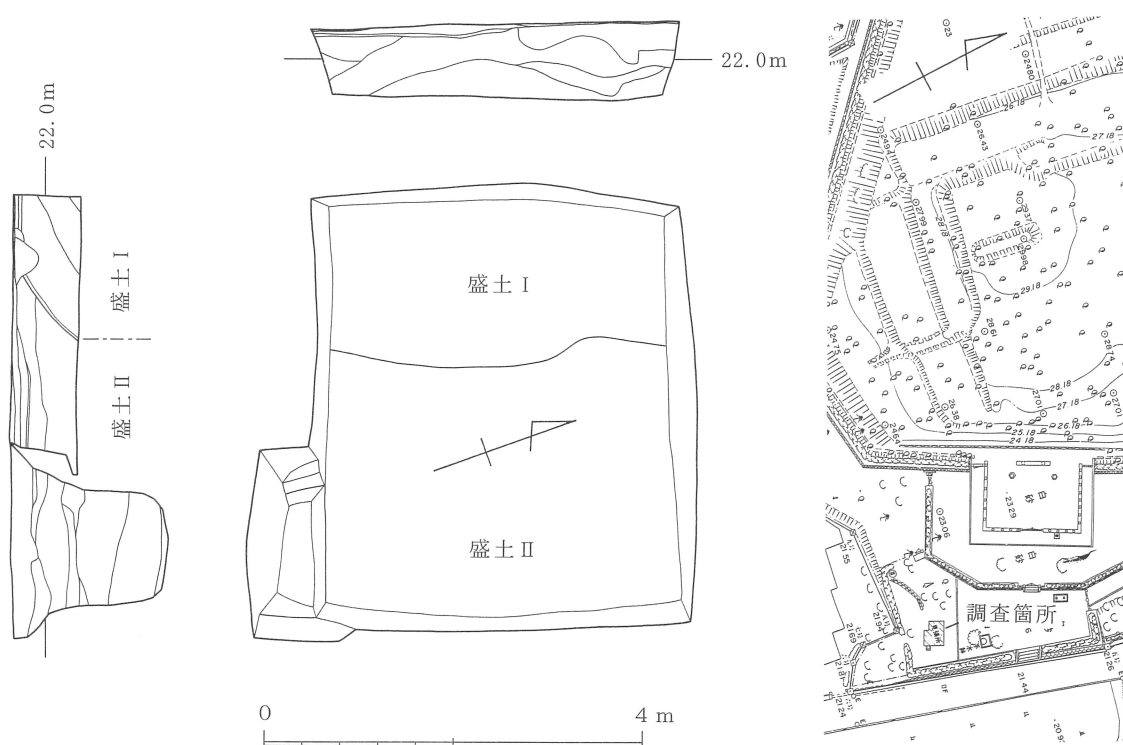
以上の結果から、工事は予定通り施工した。

(徳田 誠志)

雄略天皇 丹比高鷲原陵見張所改築工事箇所調査

雄略天皇丹比高鷲原陵は、古市古墳群の西北、大形古墳の密集地域からはやや距離をおいた場所に位置している。この度、陵前にある見張所を改築することとなり、それに伴う調査を、平成10年11月16～19日に本部職員立会のもとに実施した。見張所設置箇所は在来のものであり、新規見張所の基礎工事範囲となる4.2×3.8mの範囲を深さ0.8m、浄化槽埋設箇所は1.7mまで掘削し、調査を行った(第21図)。

調査の結果、発掘範囲内は2時期に分かれる盛土であることを確認した(旧：盛土Ⅰ・新：盛



第21図 丹比高鷲原陵調査箇所の平面図・断面図(1/80)および位置図(1/1000)